

駿豆相交界地方の聚落に對する歴史地理

的考察（豫報）（二）——伊豆文化の研究、第二報——

耕 崎 正 男

讀者は陸地測量部五萬分の一地形圖、秦野、小田原、熱海、山中湖、御殿場、沼津、修善寺の七葉を參照せられんことを希望す。

目 次

- 一、緒言
- 二、古代文化（聚落）の遺跡と其の地理
- 三、文化發展の経路（略報）
- 四、古來の交通系と其の變遷
- 五、聚落の生立
- 六、政治及び交通系統の變遷と聚落の消長
- 七、聚落の分布
- 八、現代の聚落と古代文化の遺跡との關係

一、緒 言

筆者は該地方に遊ぶこと三度に及ぶも、第一回は主として火山の見學で岩石の採集に留まり次回には聊か文化の考察を試みたとは云へほんの一斑であり、第三回は震災地の見學で、且延日數多からず從つて足跡未だ此の地域に普から

駿豆相交界地方の聚落に對する歴史地理的考察（豫報）

ず、加ふるに今述べんとする問題は廣漠たる意味に於ける見聞の一部分で甚だ淺薄であり、且又多くの文献を涉獵するの便を有せず、從つて偏見に陷れる恐れなきを保せざるも、興味あるこの地域に關して未だ人文地理學的文献の甚だ乏しきが故に、未熟不完全をも顧みず一文を草した譯である。即ち論文としてではなくアウトラインを描いたものであり、豫報であるが、公表して置けば識者の垂教が仰がれて後學の爲となり、若し又青年諸子に對して課題の意味となるならば、速に研究の歩武が進められ、間接ながらも幾何かお役に立たうかと考へて早鐘を敲く次第である。



今述べんとする地域は静岡縣駿東、田方二郡の一部及び神奈川縣足柄上、下兩郡に跨る地方で、北は愛鷹を含む富士の裾から丹澤山塊の南西部及び洵綾地塊の西部即ち酒匂川流域に限り、南に於ては東は宇佐美附近から田原野の南を経て達磨山に到る地域を包含するもので、稍廣い意味に於ける自然地理的には一單元の一部を爲すものであらうが、人文的には大體二つの單元に分れる處である、けれども亦一つの單元とも見做す事が出来るのである。即ち是を歴史に徴するに、上古に於て駿河相模の區別なく相模と呼ばれた(津田秀郎氏)のは此の地を一單元と見たものとする事が出来るし、大化の改新によつて一時たりとも伊豆は駿河に合併されたのは東北側と別の單元としたのであるが、北條早雲は小田原を手に入れ茲を根城として阪東に威を振ふたけれども自分自身は常に韮山に居て駿東、田方の地方を忽にしなかつたのは、種々理

由はあつたらうが此の地方を一單元と見てゐたものと見る事が出来るし、氏直が小田原に居て秀吉に對抗するのに、氏邦の獻策を却けて最初から所謂最後の窮策を以てして敗北したのは、此の地が一單元なるに氣付かなかつたものと考へることも出来る。又徳川氏時代に入つて東北は小田原藩、西南側には韮山に最も信頼すべき側に代官を置いて此の地を治めしめたのは、一にして二の單元を、二にして併も合體して治めしめたものである。又社家村河合家の三島曆が伊豆相模の二國に頒布するの免許が與へられてゐたのは大體この地を一單元と見たものであらうし、維新後に韮山縣を置いたのは東北側と別の單元として取扱つたものであり、その後明治九年迄足柄縣を置き、縣廳を小田原に置いて豆州及び相州の大部を治めた際、支廳を韮山に置いてゐたのは紛ひもなく此の地方を一單元として併も二の取扱を爲したものであつた。

今此の人文地理學的に二にして、一、一にして二の地域の併も其の交界地方を一單元として

述べんとするのである。

二、古代文化（聚落）の遺跡と其の地理

石器時代及び金石併用時代の遺跡竝に古墳の分布を見るに、先づ著しいのは富士愛鷹の山麓で、富士郡の須津から引續き浮島、鷹根、金岡の諸村に亘り、現在の山麓に連る聚落の上段を爲して山麓面に整列するものである。然るに是等は愛鷹山の開墾に伴ふて古墳の發掘されるもの多く、又多くは無意識的に發掘され出土品の完全ならざるもの多き中に浮島村大字石川の長谷川仁三郎氏が同村大字下り石川字平林の大澤溪谷にて發掘した一古墳の副葬品全部を完全に所持せる如きは實に珍とすべきである。

更に東北方に延び黄瀬川の左岸に及び北上村より南方、三島、錦田、中郷、函南諸町村の緩な山麓地方に多く、而して韭山村には極めて少いのである。函南村柏谷の百穴は其の數五六十に達し方向は南面或は南東面するもの多く、入口は高さ約一・三米の畧半圓形を爲し内部は

相當廣きものあるも多くは三疊敷より稍々廣き程度のもを畧正方形に近くしたる程度で、高さは一・五米内外のものが多し。分布状態を見るに間隔僅に一米より二米或は三米内外のものが横に整列し、又上下に階段を爲して整然と列なる様は、之を遠望する時恰も高層のビルディングを見るの觀がある、と稱しても敢えて過言ではない。百穴及び上澤竝に赤王等に就いて古代民人の穴居の遺跡とされ又古書にも記されてゐるが近時の研究では飲料水を得るに甚だ不便な點及び形狀よりして古墳とされて居る。大場の山の端附近のものは極めて飲料水に不便な地點にあるものもあるが亦便な地にもあり、セメント材料採掘のため破壊されつゝあるものも多々見受けられる。

更に田代丹那地方に於ては先づ田代附近で盆地北端の一軒家の上方（北）より盆地西方の田代開墾地に石器及び土器の破片を出土し、高原狀の緩斜面に位してゐるのである。丹那盆地に於ては東北部なるグミ澤より笹ノ窪を経て宇宮の

上に連り、更に柿澤川を南に涉つて宇川尻に及び東南に迂廻して金山澤を經、テントコ、山ノ寺に至るもので、只玄ノ嶽の山影なる東南の一隅を残して殆ど盆地を包圍する遺物發見の地點が愛鷹山麓の場合と等しく全部現在の聚落より高位置にあるのである。更に北方のヌタバから稍々下つては鬢ノ澤に於ける石器(石棒)の發見及び下丹那に於ける石鏃の發見乃至平井に於て石器(石鏃等)及び土器の破片の發見があり、更に一パイ水及びバシタに發見される。愈々下れば前述柏谷の百穴となる。

更に轉じて狩野川の左岸を見るに、最も著しきは川西村で長岡宇洞(ほうち)の石棺は餘りにも有名であり、小坂の駒形古墳、長岡の萬法院横穴、若宮塚等枚舉に遑あらぬ程である。北に延びて江間村に存し更に大平村の一部、清水村の一部に存するのである。尙川西村の西に續く内浦、西浦の海岸附近にも存する。又半島西岸の戸田村井田に多いことも殊に記憶せねばならぬ。更に東南に轉じ田中村を見るに韭山の稀少なのに引

替へて甚だしく特に軌道の東側に著しく田京附近を以て最大とする。筆者は實見の機會を得なかつたが尙其の他狩野川の上流に點在し、東岸に於ては伊東より熱海に亘つて點在する(静岡縣史第二卷)と云ふ。

東北側に於ては關本附近に石斧が發見され又彌生式土器も出土するのである。更に御殿場を中心として富士箱根の裾合谷に點在するのである。尙賀茂郡城東より稻取、下河津、白濱、濱崎、朝日、竹麻方面に亘る東南海岸及び其の附近に數多存在し、又西南岸にもあつて式内社の分布と畧々一致して居る。尙大島にも石器時代の遺物を存すると云ふ。

扱以上の分布に就いて一部の考察を試みるに駿河灣北岸地方に於て未だ砂丘帶に發見なきは該地域の地形的發達が近來のことと従つて古代の民族に住地として撰ばれなかつたことを意味するもので、浮島原は云ふも更なりである。而して山の手に於ても現在の聚落に比して高位置にあるのは、一には現代人と雖も墓地を高所に

撰ぶは一般の慣はしではあるが、當時低地は未だ乾燥せず古代人類の住所として不適當であつた事を意味すると同時に當時の文化の様式に起因するものであらう。金岡村岡宮に於て昭和二年七月清水湧出地の掘鑿に當り土器の累積するを偶然發見したのは古代民族と清水との關係を物語る資料として意味深いものである。

北上村から三島、錦田、中郷、函南の地點も亦概して現在の聚落より高位置を占め、多くは箱根、熱海の極めて緩かな裾野であるために、古代民人の居住に最も適當な地點として撰ばれたものであり、特に竹倉、夏梅木、谷田等は文化の進歩と地形の進展に伴はれて山麓地帯に下つた面影を留めてゐるものであらう。丹那盆地周圍のものも亦遺物發見の地點が現在の聚落より高位置を占めてゐるのは、當時最早盆地が湖水ならずとするも低濕で山麓が未だ人類の居住に適しなかつた状態を想はしめるものである。

葦山村の低地及び之に續く西北の地方に未だ發見されざるは、此の地が極めて低平で賴朝配

流の當時ですらも狩野川本流は現在の流路を採りたりや否や不明に屬し、今駿豆電鐵線に沿ふて川の遺跡と思はれるものが現存し、伊豆長岡驛附近より葦山驛の間に古川ふるかはなる地名の存在すること、及び賴朝は大蛭島に居り蛭攻に苦しんで小蛭島に轉居したとの古傳もあり、狩野川は元南條の屈曲點から北方に向ひ葦山城址の麓を北流し向原の南で西に折れ長崎と仁田の間を西に流れ、塚本と肥田の間を経て長池に注いでゐたらしく、今尙洪水時には古の河道の狀をよく現すと云ふ。而して葦山城址附近には蛭ヶ小島を始め和田島等、島の付く地名が存在する。

要するに蛭ヶ島附近は狩野川派流に包まれた川中島であつたらしい。思ふに狩野川は初め土手和田附近を北流したものが東方熱海火山から吐出する沙泥によつて西方宇古川附近に押しやられ再轉して今の河道を採るに至つたものであらう、即ち古代に方では河川が亂流し極めて低濕で人類の居住に適しなかつたことが主で一には生活様式の關係によつて其の痕跡を留めないも

のと思はれる。

而して南側の田中村は畧々狩野川の谷口聚落の位置に當り併も田京は其の中心を爲し、加ふるに三福と共に深澤川の舊扇狀地に當り谷口聚落としての二重の資格を持つ地點である。加ふるに此の臺地は北方狩野川下流田方の平野に對して展望臺の位置に在り、政治的には宛も北上川流域に對する平泉の位置に相當するものである。従つて古往今來人類の居住地として撰ばれたのは當然である。故に古くから鎮守の森も官衙も置かれたことであらう。以上述べた如く概して古代文化の遺跡が現代の聚落に比して高位置にあること及び夫等相互の關係は「八、現代の聚落と古代の遺跡との關係」の部に於て述べるであらう。

三、文化發展の經路（畧報）

古代民族——恐らく多くはアイヌの部落が出來た後、大和朝廷の勢力の東漸により中央に存在が認められ畿内の優等民族が入り込んで地方

の開拓が進み文化の向上を來たしたには相違ないが、此の間主として漂流民によつて南方海上から文化の齎らされたであらうことは、式内社の數とその分布、祭神の系統及び三島大社の遷座による北進と其の道々に妃の宮を留めてゐること、又半島内に於ける數多の三島神社の分布狀態、漂着者の歴史及び古傳の存在すること、又其の子孫の現存すること竝に其の子孫と認めらるべき者の存在すること、南方の文化が比較的早く進んだこと、徴兵検査の結果によると南北によつて青年の體格の異なること、八丈島を始め豆南諸島の婦人の頭髮の長さこと等が此の問題に對して直接間接の資料となるが、多くの紙數を要し尙且多くの傍證を必要とする爲稿を更め「房總以西太平洋岸の民族移動に關する歴史地理的考察」として再び本問題を述べることとし今回は單にアウトラインに留めるが、要する處山腹を下り或は海岸、溪谷を傳つて南下したものがあり、南方から北進したものと西方から進んだ者との三者が狩野川流域に先づ混在し

生理的・心理的變化を起し平安朝末期になつては最早從來の文化は京都文明の爲に閉息してしまつたのであるが、南方には今尙肉體的に其の痕跡を留めてゐると思ふ。

四、古代の交通系と其の變遷

何れの地に於ても畧々共通の問題ではあるが本地域に於ては特に交通との關係が濃厚であるから、未熟ながら豫備知識の意味に於て此の點を覗ふことにした。

足柄箱根の地方は東西の要路に當るも峻嶮で交通の不便は幾多の悲喜劇を生じ國民文學を産み又戦畧上屢々利用されたのであつた。往昔の足柄路は黄瀬川の谷から御殿場に至り此處で鮎相川の谷に出で、竹の下から今街路樹の樹てる邊を縫ふて足柄峠に出てゐたのであつた。阪東の稱は此の御坂から起つたのである。若も新羅三郎義光が豊原時秋にアラビヤ音樂(大食調)を授けたごときことがあつたとするならば、恐らく此の邊であつたらう。併しながらまだ此の頃に

は定まつた關所もなかつたらしい。此處から地藏堂の邊に下り矢倉澤を経て坂本驛(今の關本を中心とする地)に至つてゐたのであつた。古事記によれば日本武尊御東征の歸路足柄の坂本で食事をとられ坂を登つて吾嬬を歎かれ、甲斐へ通られたとある。随分古くから開かれた街道と見える。小田原北條の古城址は足柄峠の頂上にあり徳川氏時代に入つて箱根路が官路となつてからも大久保氏の守衛に屬する矢倉澤の番所と云ふ足柄の關所を置いてあつた。即ち矢倉澤の南部に關場と云ふ小字があるが其處に關所と裏關所とあつた。

箱根路は足柄路に比べると峻しいけれども近道で、清水吉彦氏の研究に依つて明かとなつた如く和漢三才圖繪に「元明天皇和銅七年始闢此山道」とあつて皇紀一千三百七十四年即ち奈良朝の初期既に道は開かれたけれども往還は足柄の方へ懸つてゐて箱根はまだ眞の公道ではなかつた。即ち日本紀畧轉錄「大日本史に桓武天皇延暦二十一年五月以富士山焚石壘」足柄路

關「宮荷路」翌年五月廢「宮荷路」復「足柄舊道」とある。即ち奈良朝初期に道は出來たが公道ではなかつた。然るに平安朝初期に噴火に基く富士の山火事の爲に足柄の官路が塞つたので箱根の道を開いたのが公道としての初であつたがそれも間もなく廢せられたけれどもこれから多くの健脚者が通ずるやうになつたらしい。即ち十六夜日記によれば作者阿佛尼が後宇多天皇の建治三年十月十六日京都から鎌倉に下つた道中記に「二十八日伊豆の國府を出でて箱根路にかゝる（中略）足柄山は道遠しとて、箱根路にかゝるなりけり（中略）いとさかしき山を下る。人の足もとゞまり難し、湯坂とぞいふなる。辛ふじて越えはてたれば又麓に早川といふ川あり」とあり、如何に勝氣で且悲憤の情を晴らさんと幕府を指して急いだとは云へ女性の身では困難であつたことが覗はれる。其の後足利尊氏が鎌倉で叛した際新田義貞は脇屋義助と共に征討に向つたが、義助は足柄路を登り竹の下附近まで、義貞は箱根路を登り水飲（今山中新田の小字）まで進んだのであつて明らかに兩道を扼せんとしたのであつた

足柄、箱根兩道の西方を見るに、遠き昔の足柄路は蒲原から富士愛鷹間の十里木越を經由したものと考説もあるが難路である爲に一般の通路であつたか否かは疑問である。後藤信平、森信吾兩氏によれば往昔の通路は愛鷹の下腹面にて海拔約百米の高度を保つて居り其の後山麓に下つたのである。鎌倉時代の初期には愛鷹の南側は山麓の根方街道と濱街道の兩道があり、根方街道が本道であつた。百米線の邊を通じてゐたのは恐らく平安朝の中葉以前のことである。足柄路への通路であつたらう。其の後時勢の進運に伴ふて山麓に下り、砂丘の發達と交通系統の進展の爲に鎌倉時代に入つて濱街道や箱根路が發達するに及んで車返が繁昌し初めたらしく、又黄瀬川宿も黄瀬川の東岸に榮えたと見える。足柄路箱根路共に初めは本宿附近を經たであらうが後には車返が本宿、三島の分岐點となつたではなからうか。元和四年箱根に關所を設け箱根宿を開いて以來箱根路が天下の公道と決定して從來の足柄路は間道となつた。

扱往昔の箱根路は近世の東海道箱根八里とは一致してゐなかつたもので、徳川時代の官路に到達するまでには幾變遷があつた。今一例を舉げんに近世の箱根官路の東半は、箱根宿から元箱根部落の南縁を經、權現坂を登つて屏風山と双子山との間を通り、蘆ノ湖の最初の火口瀬須雲川（上流では左岸、中流では右岸）に沿ふて湯本の三枚橋に出たのであつたが、其の昔小田原北條の當時には元箱根から芦ノ湯を通り平坦な鷹の巢山を經て湯坂を下り湯本に出てゐたので（鎌倉時代にも湯坂を通つたことは前記十六夜日記でも知られる）、北條氏は此の要路を扼する爲に鷹の巢山に城を築き又其の前衛として山中新田にも山中城を置いた。西側の舊道は初は根方街道から本宿を經たであらうが後には鎌倉時代以後發展した濱街道沿ひの車返から恐らく黄瀬川を經て三島に來たことは十六夜日記に「二十八日、伊豆の國府を出でて箱根路にかゝる」とあるによつても明らかである。茲から北に向ひ國府原（今の北上村幸原）を經、壹町田より澤地を登り山中（今の元山中）に至

り箱根峠附近より蘆川宿に通つてゐたらうと思はれる。別に間道として近世の官路の邊を三島から山中新田を經てゐたものがあり、尙三島から川原ヶ谷を經て山田附近を通り元山中に至るものもあつたが、清水氏によれば近世の街道が慶長九年以來公道となつて、改修が行はれたのである。然るにそれは大正十年より十二年に亘り大改修を試みて遂に今日の自動車道路となり富士屋自動車の通路となつた。扱此の蘆川宿に就いては今の元箱根であらうとの考説もあるが箱根町は關所設置當時に於て現在の聚落の西端に農閑期には木工細工などを營む四、五戸の農家がありこゝを蘆川と稱してゐたこと、しかもこれが今尙箱根町大字三島町字蘆川町として現存する事實に徴して恐らく此處が其の名残であらうと思ふ。

酒匂川の溪谷も亦甲駿等に對して輕視することの出来ない要路で、小田原北條から見ても重要な處で古城址が散點して居り、徳川時代に入つても谷箇の番所を始め數箇の關所があつた。

東海岸も河津、伊東、熱海、伊豆山、湯河原等がある爲に鎌倉時代から交通が開け、徳川時代に入つてからは根府川（谷口の南側）に番所を置いて伊東方面の交通を監視すると同時に、輕井澤の古驛によつて西岸とを結ぶ箱根官路の裏街道とも見るべき南の間道をも併せて監視したのであつた。而して又御殿場から乙女峠を越して湯本に出る間道もゆるかせにならぬもので、日本武尊の御通過遊ばされたと傳へらるゝ碓氷峠は仙石原と宮城野間であると云ふ考説さへもある位で往昔から道はあつたらしく徳川時代には仙石原に箱根の裏關所があつた。又地方的ではあるが奥伊豆に對しては狩野川構造線が最も重要な役割を演じてゐたことは今も昔と變りがないのである。

是を要するに吾々の祖先は自然の通路を撰擇し夫に従つて箱根の北を草鞋で歩いたのであつたが健脚者は横斷した。其の後江戸時代に入つてからは「函谷關もものならず」と歌はれた天嶮を切開いて籠で越すことになり、明治の大御

代となつてからは文明の利刃を自然に順應させて足柄箱根の北方を迂廻する東海道線の開通となり、更に大正の御代に入つてからは自動車をも以て箱根八里（須雲川の谷は然らず）も裏街道も熱海街道も征服することになつたのであるが、更に大正から昭和の今日に於ては丹那てふ自然を撰擇して世界有數のトンネルを穿ち苦し紛れとは云ひつゝも自然を活用して所謂文化の向上を計りつつある現狀である。

更に又側面から見ると東海道は、延寶八年以後改修し、萬延元年に井伊直弼の後を受けた安藤信正が幕府の威信の恢復策として公武の合體を計り、和宮親子内親王の將軍家茂への御降嫁を奏請し勅許を得たので、其の御通過の爲に文久元年大改修を試み箱根山官路の全道に敷石を敷いた（敷石のことは文久三年家茂が攘夷の昭勅を賜り上落の際と云ふ説もあるも其の時には小改修に過ぎぬ）併しこの御降嫁奏請事件は尊王論者の憤激を招いて東海道線をつけられたが今は丹那に世界有數の大風穴を開けつゝある。文久元年の工事に就いて清

水氏は「西箱根東海道古道の考察（大正十四年）」に於て「今より六十四年前に過ぎざるを以て、

此の工事に携はりたる古老尙太だ多し」と、何と云ふ今昔の感であらう。（未完）

世界油田の現状と石油工業

近 藤 堅 一 譯

本編はプリンストン大學、地質學教授 W. T. Thom. Jr 氏著 "Petroleum & Coal, The Keys to the Future" の第九章 Oil fields of the World と第十章 The oil industry を抜萃せる翻譯である。同著は、先づ石油發達史より説いて近代の石油工業に及び地質、鑿井、探油、製油、輸送、販賣、經濟統計に就き米國石油事業の現状を紹介。

第一編 石油工業

更に世界の油田の現勢に就ては、各油田の分布、その地質埋藏量に依る等級、現状及び將來を述べ、地質學的に又政治學的に見た油田の價值を論じて餘すところがない。

自分は、石油地質學を奉じ油田調査に従ふものであるが、同著は通俗的に石油工業の全般の智識を網羅して且つ地質學的に扱はれてゐるので、これまでに類例がない。

恐らく石油と無關係な何人が讀まれても興味深いものと思ふ。こゝに敢て拙譯をした所以である。

北米は全世界の石油總産額の70%を産出して居る。かく米國の長期に亘つての産額の増大は、一部の識者にては國內資源の急速な枯渴の恐慌として悲觀されて居るが、又他の一部では、此等の資源の無限大に廣域なるものたる一証據として極めて樂觀されて居る。

將來に於ける石油の供給が充分なりや否やの問題は、詳細に次章で述べることにする。

この討論に入る前提として本章に於ては、石油の産油過程、製油、産油の分布等に就いての概